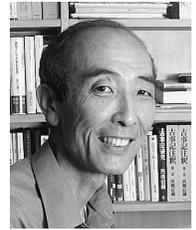


## 英語とのつきあい



長谷川 宏

わたしは英語を話すのと聞くのが苦手だ。娘が笑って言う。「お父さんはシェイクスピアやラッセルやヘミングウェイを原書で読むくせに、英会話となるとしどろもどろなんだから」と。高校時代に合衆国に留学した経験をもつ娘は、日常の英会話に不自由することがない。

わたしが中学・高校時代を過ごしたのは、1952年から58年にかけての6年間だ。敗戦後の貧困と混乱がまだまだ大きく日本社会を覆い、西洋の文化と精神にたいするあこがれが強く感じられていた時代だ。英語を学ぶことは、あこがれの西洋文化を理解するもっとも重要な、もっとも確実な手段の一つだ、などと言われ、若いわたしはその言葉を素直に受け入れていた。

その一方、アメリカ合衆国やイギリスは簡単に行けそうもない遠い国であり、そこに住む人びとと英語で話し合う場面など容易に想像できなかった。“This is a pen.”とか“I am a boy.”と大声で唱えるほやほやの入門段階でも、外国人のなかに混じって自分が英語をしゃべっている光景よりも、安楽椅子に坐って原書を読んでいる光景のほうが、現実性のあるものに感じられた。

それは、わたし一人の感覚や思いこみではなく、英語を学ぶ多くの人びとに共有される感覚であり、思いこみだった。読むことと書くことがまずあり、話すことと聞くことはずっと遠くにあるというのが、そのころの英語だった。大学受験に備えて難解な構文の理解や特殊な単語の暗記に精力を注いでいるとき、それが英会話に役立つとは思えなかった。

その結果、読み書きは英米人並みだが、話したり聞いたりは不得手というおかしな人間が出来上がった。

わたしの同年配ではそんな人間が珍しくないと思うが、さて、英語の学びかたとしてそれはよかったのだろうか。

何年もかけて英語を学びながら、日常会話で英語が使いこなせないのはやはり寂しい。使いこなしている人を見ると、うらやましくもなる。うらやましが昂じると、原書を読むことに偏した自分の英語学習はなんと固苦しいものだったかとも思う。

が、その一方、日常会話ができることをもって足れりとしていたら、英語の学習はわたしの実際にたどった道筋とはまるでちがったものとなり、合衆国やヨーロッパの精神や文化への通路とはなりにくかったようにも思う。1950年代の学校教育によって道を開かれ、その後もさまざまな英語を読むという形で続くわたしの英語とのつきあいは、戦後という時代が要請し、わたしもなかば納得して踏みこんだ道であって、それはそれで意味のある一つのつきあいの形だったようにも思う。

時代は変わった。いまは、欧米の文化や精神を理解するための手段としてよりも、日常的なコミュニケーションの手段として英語を学ぼうとする人が圧倒的に多いだろう。読むこと書くこと以上に話すこと聞くことが重視されるのは自然の勢いだ。そのとき、振子が反対にふれて、今度は、話したり聞いたり得意だが、読んだり書いたり苦手という人がたくさん出てきほしないか。それはいいことなのか。教育のありかたとしても文化交流のありかたとしても、考えてみるべき問題だと思う。

(はせがわ ひろし・哲学者)